

退避を撤退の言葉に変換して菅元首相の撤退阻止説を支えた朝日

《■担当記者はこう見た

暴走する原子炉を残し、福島第一原発の所員の9割が現場を離脱したという事実をどう受け止めたらいいのか。吉田調書が突きつける現実には、重い課題を投げかけてくる。

吉田氏は所員の9割が自らの待機命令に違反したことを知った時、「しょうがないな」と思ったと率直に語っている。残り1割の所員も原子炉爆発の場合の大量被曝を避けるため、原子炉を運転・制御する中央制御室でなく、免震重要棟2階の緊急時対策室にほぼ詰めており、圧力や水位など原子炉の状態を監視できない時間が続いた。

吉田調書が残した教訓は、過酷事故のもとでは原子炉を制御する電力会社の社員が現場からいなくなる事態が十分に起こりうるということだ。その時、誰が対処するのか。当事者ではない消防や自衛隊か。原発事故に対応する特殊部隊を創設するのか。それとも米国に頼るのか。

現実を直視した議論はほとんど行われていない。自治体は何を信用して避難計画を作ればいいのか。その問いに答えを出さないまま、原発を再稼働して良いはずはない。(木村英昭)》

問題の焦点はどこにあるか。撤退と退避という言葉や争点となるであろう部分を太字にしたので、読者も自分の目で問題を検証していただきたい。まず撤退と退避という用語についていうと、いうまでもなくその意味は異なる。撤退は現場から退き、二度と現場に戻ってこないことである。退避は避難にすぎないから、危険が去れば現場に戻ってくることが含意されている。

この用語の使用に注意してみると、吉田所長の発言箇所には撤退ではなく、退避という言葉が見られ、逆に朝日の記事には撤退という言葉が一貫して用いられていることがわかる。東電の見解にも見られるのは撤退ではなく、退避である。面白いことに、朝日の記者は吉田所長や東電が退避と言っているのに、退避という言葉撤退という言葉に置き換えて把握しているように感じられる。つまり、こういうことである。撤退するなら、ただかたきキロ離れた、しかも安全地域とはけっしていえない第二原発ではなく、もっと遠くへ、要するに、現場へ戻って来れない地域に向かうであろうのに、待機するつもりの第二原発への避難なら、どう考えても退避と考える以外にない。

言葉の使用に関しては敏感であるべき記者が、撤退と退避という言葉をも混同するはずがないとすれば、これは意図的なものであろうか。私の推定では、記者の頭の中には私が船橋洋一の主張に影響されていたように、菅元首相による作業員撤退阻止のストーリーが強固に巣くっていたのであろう。おそらく疑問の余地なくこのストーリーに従って、「吉田調書」を読み進めていったと思われる。そこで調書が退避問題に入ったとき、吉田所長が口にし、東電幹部が報告するなかで使われている退避という言葉の一つ一つ正しく撤退と言い換えていく果てに、吉田所長の「待機命令に反して所員の9割が第二原発へ撤退した」というスクープが浮かび上がってきたのであろう。有頂天になって小躍りしていたであろう様子が目に浮かんでくる。

吉田所長の「次の指示を待てと言ったつもりなんです、2F(第二原発)に行っちゃいました」というので、しょうがないな」と思ったという発言が唯一の裏付けであるが、記者の撤退という思い込みに支配された頭では、たとえ吉田所長が想定していた以上の人数が2Fに行ってしまったとしても、それは「しょうがないな」で済まされる程度のことであり、現場離脱ではなく、混乱した現場におけるちょっとした行き違いにすぎないと判断することも、また吉田所長自身が自分の命令に違反したとも全く思っていなかったことにも注意が行き渡らなかったのである。吉田所長の「しょうがないな」という呟きのような思いに自分の気持を馳せることはなく、スクープに目が眩んでしまったのであろう。ここにスタップ細胞発見の歴史的快挙会見後の地獄巡りや佐村河内事件の落とし穴と同質の問題を覗き見ることはたやすい。

さらに朝日にとって都合なことは、朝日の記者以外の誰も「吉田調書」を手にとって読むことも、朝日の記事を検証することができない状態に置かれていたことである。しかし、吉田所長自身にインタビューしたり、彼と接触してきた者たちのなかからは、吉田所長の口から朝日のスクープ記事に書かれているようなことは一言も聞けなかったこともあって、疑問や反駁の声が多く噴き出していたことと思われる。前述したように、私は船橋説に影響されていたために、それらの異論にはほとんど耳

を傾けてこなかった。しかし、いまにして思えば、私が船橋説に疑問を感じてもよかったと思われる機会はあったのである。

船橋は当然吉田所長にも取材していただろうし、406号で取り上げているように福島第二原発の増田尚宏所長との対談(『文藝春秋』13.8)で、〈第一の2号機が危機的な状況になって15日朝には、第一から約650人が第二に避難して〉くるが、そのときに指示はなく、〈テレビ会議のなかで、私が「第一の人間来ても大丈夫なような準備が終わったからいつでもどうぞ」と発言しているんですが、これは事前にそういう指示を受けて「できました」と報告しているのではなくて、既に爆発の映像を見た12日の段階で、収容場所をつくるよう指示して、13日の段階で受け入れの準備も終えていたんです。ですから「準備は終わったから、後は勝手に使ってください」という意味で、受け入れ云々で、自分たちの作業が妨げられるのは避けたいという気がありました。〉というやりとりが行われているにもかかわらず、そこでは第一から吉田所長の命令に背いて作業員が撤退してきたというような話は一言もなされていないのである。

さて産経が8月18日に「吉田調書」を入手することによって、朝日の調書独占状態は破られ、その日の産経には満を持していたように、ジャーナリストの門田隆将の次のコラム「朝日新聞は事実を曲げてまで日本人をおとしめたいのか」が掲載された。

《東京電力福島第1原発事故で現場指揮を執った吉田昌郎所長に対する「吉田調書」について、吉田氏らを取材したジャーナリスト、門田隆将氏が寄稿した。

職員の頑張りわかる

産経新聞が入手した「吉田調書(聴取結果書)」を読んで、吉田昌郎所長と現場の職員たちの命をかけた闘いのすさまじさに改めて心を動かされた。「本当に感動したのは、みんな現場に行こうとするわけです」と、危機的な状況で現場に向かう職員たちを吉田氏は褒めたたえている。いかに現場が事態を収束させようと、そして故郷、ひいては日本を救おうと頑張ったのかがよくわかる内容だ。

拙著『死の淵を見た男』の取材で、吉田氏や現場の職員たちに数多くインタビューしている。どんな闘いが繰り広げられたかは取材を通じて知っていたが、その時のことを思い出した。

また、菅直人首相や細野豪志首相補佐官らとの電話によって、事故対策を講じる吉田氏の貴重な時間がいかに奪われていたかもよくわかる。くり返される官邸からの電話に「ずっとおかしいと思っていました」と吉田氏は述べている。

特に細野氏が毎日のように電話をかけてきたことで、吉田氏が相当困惑していた様子が伝わってくる。

全員撤退問題については、「誰が撤退と言ったのか」「使わないです。『撤退』みたいな言葉は」と、激しい口調で吉田氏が反発しているのも印象的だ。吉田氏がいかにこの問題に大きな怒りを持ち、また当時の民主党政権、あるいは東電本店と闘いながら、踏ん張ったかが伝わってくる。

慰安婦誤報と同じだ

それにしても朝日新聞が、この吉田調書をもとに「所員の9割が所長命令に違反して撤退した」と書いたことが信じられない。自分の命令に背いて職員が撤退した、などという発言はこの中のどこを探しても出てこない。

逆に吉田氏は、「関係ない人間(筆者注=その時、1F〈福島第1原発〉に残っていた現場以外の多くの職員たち)は退避させますからということをやっただけです」「2F(福島第2原発)まで退避させようとバスを手配したんです」「バスで退避させました。2Fの方に」と、くり返し述べている。

つまり、職員の9割は吉田所長の命令に「従って、2Fに退避し、朝日の言う『命令に違反』した部分などまったく出てこない。

だが、朝日の報道によって世界中のメディアが「日本人も現場から逃げていた」「第二のセウォール号事件」と報じたのは事実だ。最後まで1Fに残った人を「フクシマ・フィフティーズ」と称して評価していた外国メディアも、今では、所長命令に違反して所員が逃げってしまった結果にすぎない、という評価に変わってしまった。

事実と異なる報道によって日本人をおとしめるという点において、先に撤回された慰安婦報道と図式がまったく同じではないか、と思う。なぜ朝日新聞は事実を曲げてまで、日本人をおとしめたいのか、私には理解できない。》

